

# 教材としての『方丈記』の可能性

—「結び」の扱いを中心に—

大平 高司

岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科

(二〇一四年九月二二日受理)

## The Possibilities of Using “Hojoki” (“The Ten-Foot Square Hut”) as a Teaching Text

—Focusing on the Finale—

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development

OHIRA Takashi

(Received September 22, 2014)

### 要旨

筆者はかつて高校において「結び」を含め『方丈記』全文を教材として授業を行い、成果を得た。しかし、後に「結び」の扱いに課題があるとわかった。そこで、この稿ではまずその実践の内容と課題について記した。次に、現在教科書に『方丈記』のどの部分が掲載されているか調査し、採用されている部分の教材としての意義と課題について考究した。さらに、現在教科書に掲載されていない「結び」を教材化する意義と課題、対応策について考究した。

(キーワード) 方丈記・結び・古典B・教材

### 1 はじめに

『方丈記』は、古典の三大随筆として『枕草子』『徒然草』とと

もにあげられるが、他の二つの随筆とは分量・構成等においてかなり異なっている。例えば、『枕草子』『徒然草』と比べて大変短く、四百字詰め原稿用紙にして二十数枚に過ぎないという点である。ま

た、他の二つが折々に書きつづられた様々な文章から成り立っているのに対し、『方丈記』が一貫した構想の下に書きつづられた、緊密なまとまりのある文章である点である。その文体は、和漢混淆文体の先駆として格調高く、従来、高等学校の国語の教科書において綿々と掲載が続けられてきた。

私自身もかつて数回この傑作を授業で採り上げた。この稿では、かつての私自身の『方丈記』の授業実践とその課題を述べるとともに、教科書に掲載される章段の傾向、「結び」の部分の扱い方について考察し、教材としての『方丈記』の可能性について考えたい。

## 2 『方丈記』の構成と主題

まず、『方丈記』の構成については、従来、三段、五段・六段・七段等の分け方が考えられてきたが、ここでは、参考までに私が基本的なものと考ええる五段構成で示す。

### 【前半】自分の体験からみた人と住まいの実相

#### 第一段 序

(行く河の流れは夕々を待つことなし。)

内容……人と住まいの実相についての見解

#### 第二段 世の不思議とまとめ

(予、もの心の心を知れりしより心<sup>われ</sup>を休むべき。)

内容……人と住まいの実相を裏付ける五つの災厄の体験

(序の論旨の具体例)とまとめ

一 安元の大火

二 治承の旋風

三 福原遷都

四 養和の飢饉

五 元暦の大地震

六 まとめ

### 【後半】方丈の庵での生活と反省

第三段 遁世までの経緯と方丈の庵での生活

(わが身、父方の祖母の<sup>おほは</sup>これにしも限るべからず。)

内容……自らの遁世までの経緯の回顧と方丈の庵での生活の説明

一 遁世までの経緯

二 方丈の庵での生活

第四段 閑居の気味

(おほかた、この所に住まずして、誰か悟らん。)

内容……方丈の庵で生活する意義の論証

第五段 結び

(そもそも、一期の月影傾きてこれを記す。)

内容……方丈の庵での生活に対する反省

次に『方丈記』の主題についてであるが、『方丈記』は短くまとまりのある文章でありながら、その主題をどのように捉えるかという点については、見解が分かれている。前半を評価して優れた記録文学とする見解、最終段の自己否定の言葉を重視して「この無常の世にいかによくべきかを身をもって追究した生活記録」とする見解<sup>(注1)</sup>、また、最終段を重視して真の解放への目覚めを描いた仏教文学とす

る見解<sup>(注3)</sup>、さらに、最終段の前の「閑居の気味」を訴えるのが主眼で最終段はそれに付け加える謙辞とする見解<sup>(注4)</sup>などである。

『方丈記』を教材として採り上げる場合、どの章段を採用し、何を主題と考え授業を行うかによって学習者に与える『方丈記』の印象が異なってくる。

### 3 『方丈記』全文を扱った実践

私はかつて(一九八十年)、『方丈記』全文を教材として扱ったことがある。理由は、短いながら多面的な魅力があり、構成も緊密な古典を丸ごと一冊読むという体験を生徒にさせたかったこと。また、「結び」まで読むことによって作者鴨長明の人間像に深くふれられるだろうと考えたからである。

教科書とは別に、3年生全員に副教材として講談社文庫『方丈記』(川瀬一馬校注)を購入させ、投げ込み教材という形で授業を行った。講談社文庫『方丈記』には本文と現代語訳がついているので、余り細かい文法的なことにはこだわらず、現代語訳も参考にして、内容を読み取るようにした。授業時間はおよそ十時間、B4判二枚のワークシートを作成し、内容のまとめをさせたり、印象に残った点を書かせたりしながら授業を進めた。ポイントをおいた点は、以下の点である。

- (1) 序における筆者の「人とすみか」に対する考え方
- (2) 「世の不思議」を見ての筆者の結論。及び生徒自身の印象に残った表現
- (3) 筆者の通世までの経緯と方丈の庵での暮らしぶり
- (4) 筆者の考える方丈の庵に住む利点

(5) 「結び」における筆者の考え

(6) 全文学習後の、筆者鴨長明の考え方・行動に対する感想  
最終の(6)では、授業のまとめとして、「結び」についての考え、鴨長明の人物像についての生徒の意見・感想をプリントにまとめ、意見交流を行った。以下、生徒の意見・感想を掲載する。(見出しは、意見等の違いをわかりやすくするため、私が生徒の感想文に加えたもの)

○「結び」についての感想

―やるべきことをやった落ち着き― (女子)

「仏教的な教えからいけば、長明は庵を愛し執着心を持ってしまいい、ここでの生活は失敗であったということになるかもしれない。しかし、そのための彼の焦りというものを私は感じる事が出来ない。やはり彼は幸福だったのではあるまいか。最後に阿弥陀仏をとなえるあたり、それでも、やるべきことはすべてやったのだという落ち着きを私は感じるが、それは私だけのものだろうか。」  
―今さら何ができようか― (男子)

「作者は、方丈生活を否定してはいるが、最後に『不請の阿弥陀仏、再三遍申して』いるのを見るといまさらどうしようもないではないか、といったあきらめの気持ちを感じられる。長明も、ついに仏道修行を全うすることはできなかったが、それも普通の人間としてはしかたの無いことであり、かえって、その悩む姿を見れば、長明という人間がいつそう我々自身に身近に感じられるのである。悩み、自分の生活を後悔しつつも、『余命いくばくもない自分にいまさら何ができようか。この生活を続けていくしかない』

い』と開き直っているように思われ、しかも、それで彼の心は満足しているのではないか」

○長明に対する考え

— 俗世間で暮らしてこそ —

(男子)

「長明は、俗世間をのがれて一人庵にこもったのであるが、私は、長明の考えには賛成できない。長明は、俗世間は住みにくくわずらわしいなどと言っているが、私の考えからすると、一人山の中で自分を見つめるのもいいが、それでは人間としての成長がないと思う。また、人間の生きがいというものは、人によってもちがうが、人間と人間との関係から生まれてくるのではないだろうか。だから、人間関係の難しい俗世間の中で自分を見つめ、より深みのある人間関係をつくるのが、より私にとっては大切だ。一人の山の中での生活も、自分を見つめるという点ではいいが、俗世間をさらって山の中で生活するという点は賛成できない。」

— 自分自身を見つめる目 —

(女子)

「『結び』までは、自分の草庵や閑寂な生活についてあれほど自慢げに書いていたというのに、『結び』では、きっぱりとその生活を否定している。そんな、少しあれっと思うような作者の構成のしかたが素晴らしいと思った。それに、冷静に自分自身を見つめている作者の目も、他の人にあまりない、素晴らしいものだと思った。」

— 自分に厳しく生きた人 —

(男子)

「作者が生きた時代は、一つの乱世だったと思う。人の心さえ醜くしてしまうような、乱れた世の中で、作者は実に自分に厳しく

生きたのではないかと思う。それは、この『結び』を読んで感じた。自分が長年『こうだ』と思って生活してきたことを、最後になつてもう一度振り返ってみて反省し、さらには肯定していたものを否定さえしてしまった。こういったことは、自分自身に妥協する人間にはできないことだと思ふからである。」

生徒の感想は、読み取りに未熟な点もあるが、自分なりに「結び」及び鴨長明という一人の人間について考えようとしている。授業を実践した私としては、「結び」までまるごと読み通した意義はあったと感じた。感受性豊かで自分の生き方について考える高校生という年代に、『方丈記』を「結び」まで学ぶことは、人の生き方について考えるという点でも意義があると感じたのである。

当時、私は、主題をこれだと限定して授業実践を行ったわけではなかった。「序」においては、文体の魅力や「無常観」については、「世の不思議」では描写の迫真性について、「閑居の気味」では方丈生活の魅力について学ばせた。しかし、「結び」の扱いについては、結果的に、その章段における自己否定の言葉を重視して「人生いかに生くべきか」を問うた書としてとらえる見解に近い実践になっていた。しかし、最近の研究書を読んでもみると、この見解で「結び」をとらえることは難しいことがわかった。

そこで、今後、『方丈記』をどのように採り上げ、どのように授業を行ったらいかが再考してみることにした。

#### 4 教科書での『方丈記』の採り上げ方

さて、私は投げ込み教材という形で『方丈記』全文を授業で取り

上げたが、現在の高校でこのような実践例は少ないと想像される。

授業時間数が限られるため、教科書に掲載された『方丈記』のいくつかの章段のみを採り上げて終わるか、補助的に他の章段を若干加えて紹介するという例がほとんどであろう（最近では、東日本大震災の後『元暦の大地震』の段の紹介があったらうと想像される）。

では、教科書には『方丈記』はどのように掲載されているのだろうか。平成二十五年から実施されている新学習指導要領に対応した教科書について調べてみた。

まず、『方丈記』を掲載しているか否かを見してみる。必修科目「国語総合」では、二十三点中三点の教科書に『方丈記』が掲載されている。選択科目として採用される「古典A」「古典B」について見ると、「古典A」では全五点中三点、「古典B」では全十八点中十八点に『方丈記』が掲載されている。なお、「古典A」「古典B」は高校二年次以降、各学校の実情に応じていずれかの科目を選択する可能性が高い。

次に、どの章段が掲載されているか調べた。複数の章段が記されている場合が多いので、掲載段数ごとに分けて整理してみた。章段名は、前述の構成表に記したものである。

- (1) 一つの段のみ掲載する教科書 五点
  - ① 第一段 「序」のみ 三点
  - ② 第二段の一「安元の大火」のみ 二点
- (2) 二つの段を掲載する教科書 十二点
  - ① 第一段「序」+第二段の一「安元の大火」 七点
  - ② 第一段「序」+第二段の四「養和の飢饉」 三点
  - ③ 第二段の一「安元の大火」+第三段の二「方丈の庵での生

活」(一部第四段を含む) 一点

- ④ 第二段の四「養和の飢饉」+第四段「閑居の気味」 一点
- (3) 三つの段を掲載する教科書 七点

- ① 第一段「序」+第二段の四「養和の飢饉」+第三段の二「方丈の庵での生活」 四点
- ② 第一段「序」+第二段の一「安元の大火」+第二段の二「治承の旋風」 二点
- ③ 第一段「序」+第二段の四「養和の飢饉」+第四段「閑居の気味」(抜粋) 一点

「国語総合」の教科書三点は、いずれも一つの章段だけ(「序」か「安元の大火」)採り上げている。『方丈記』の世界への導入の意味があるだろう。

「古典A」「古典B」の教科書では、『方丈記』を掲載した教科書の九割が複数の章段を掲載している。複数章段掲載の教科書の中で、「序」と「世の不思議」のいずれかの章段を紹介した教科書が約六割、「序」と「世の不思議」のいずれかの章段と「方丈の庵での生活」又は「閑居の気味」を掲載した教科書が約四割である。

※(2)の③と④の場合は、「序」を参考として採り上げていたり、その教科書会社の「国語総合」で「序」を掲載したりしていたので後の四割に含めた。

## 5 『方丈記』学習の意義と掲載章段の選び方

次に、『方丈記』学習の意義と掲載章段の選び方について考察したい。井村宏之は『方丈記』を高等学校の授業で扱う場合の意義と教材とする章段の選び方について、以下の四つの観点をあげている。

適宜要約して述べる。

(1) 文体を味わう。

対句・比喩・倒置などを用いた文体は、流麗で格調高く和漢混淆文体の先駆としての価値を持っている。「序」は、この文体の魅力を味わうに最適である。

(2) 天変地異を冷静に描写していくリアリズムの筆致を学ぶ。

「世の不思議」の章段の写実性を重視する観点である。各章段は、災厄の体験者ならではの具体的描写が多く、抽象的な思考の苦手な学習者にも強い印象を与える。古文でこのように生々しく表現とした文は少ない。「安元の大火」は災厄の恐ろしさを典型的に描き、長さも教材として手頃である。「養和の飢饉」は、やや長いが、災厄の描写に加えて人心についてふれた部分が感動的で注目させたい。

(3) 無常観という世界観を学ぶ。

作品の内容面を重視し、特に『方丈記』前半を中心的主题と見るアプローチである。「無常観」は平安末期から鎌倉にかけての時代の典型を表す思想であり、中世文学史の最重要キーワードである。これを最も理解しやすい形で端的に述べた文章が『方丈記』である。教材としては、「序」とその裏付けとなる具体的体験を述べた「世の不思議」を用意することになる。

(4) 混乱(無常)の時代における作者の人生観を考える。

『方丈記』後半を中心的主题と見るアプローチである。井村は、『方丈記』を「自照の過程」と見た高橋和夫や「自照性の強さにおいては傑出している」とした長尾高明(注8)などの評価をあげている。そして、後半のどこかを採り上げるだけでは作者の

人生観の背景が分かりにくいので、「世の不思議」と組み合わせることが最低限必要であろうと述べている。

なお、『方丈記』後半は、方丈での生活の豊かさを詳しく述べ「閑居の気味」を訴える部分と、方丈での生活を反省しそれに執着した自己を否定する「結び」の部分とに分けられる。作者長明の人生観を考える場合も、「閑居の気味」を訴えた部分までを採り上げるか、「結び」まで採り上げるかによって『方丈記』の印象が異なってくる。しかし、現在、「方丈の庵での生活」又は「閑居の気味」を掲載した教科書はあるが、「結び」を採り上げた教科書はない。

前述の四つの観点と教科書の『方丈記』の章段の採り上げ方を比べてみると、「序」と「世の不思議」のいずれかの章段を採り上げた教科書では、(1)～(3)の観点から授業を行うことになり、「序」と「世の不思議」のいずれかの章段と「方丈の庵での生活」又は「閑居の気味」を掲載した教科書では、(1)から(4)の観点から授業を行うことになる。ただし、作者の人生観を考えると、(1)「序」を採り上げない場合は、方丈での隠遁生活を賛美して終わることになり、生徒が『方丈記』の全体像を捉えきれない可能性がある。

私は、「結び」の自問と反省の記述を読んでこそ、本来の『方丈記』の魅力を知ることができると考えている(前述の井村もほぼ同様の考えである)。そこで、「結び」を含めて『方丈記』全体を教材化し授業実践もしたのだが、「結び」を授業で扱おうとした場合、問題となる点がある。次章でその点について考えたい。

## 6 「結び」を教材化する場合の問題点と対応策

「結び」を授業で扱う場合、主な問題点は二つある。

第一は、「結び」の位置づけについて異なる考え方があり、授業でどの考え方に則って「結び」を扱うか検討が必要な点である。

第二は、分量の問題である。「結び」の意味をより深く理解しようとするれば、その前の方丈生活の意義を主張した「閑居の気味」を載せざるを得ない。すると、最低でも「序」、「世の不思議」のいずれかの段、「閑居の気味」と「結び」を掲載することになり、分量がかなり多くなってしまう。

第一の「結び」の位置づけについては、木下華子が指摘するように「長明の告白だとされてきた期間が長い」<sup>(註10)</sup>。しかし、近年は、作品構想上あらかじめ準備された方法と見る考え方が出てきている。

後者の考え方は、『方丈記』は極めて整然とした論理構成に基づいて書かれており、「結び」もまた作者の構想の下に記されたとする。その上で、安良岡康作は「この五段の展開は、(四)を中心とし、頂点として、(一)(二)(三)は、それに達するための前提的位置にあり。終りの(五)は、その自己否定的発展である点において、止揚的意義を持つものであることは明らかである。」と述べている。<sup>(註10)</sup> 大曾根章介は、漢文の詩序と『方丈記』が五段構成という点で合致し、しかも詩序の第五段が作者の謙辞となっていることに『方丈記』の第五段の「結び」も適っていると指摘している。<sup>(註11)</sup> さらに、木下は、結びが「極めて思想性を帯びた長明の懊悩と転換点の現れ」だとする考え方に對して、「論理的に構成された作品であることを思えば、終章に至って、ここまで展開してきた自らの論と

仏教的な価値観との相克が忽然と高まり、彼の苦悩が作品に露呈したと考えるのは不自然だろう」<sup>(註12)</sup>と述べている。「結び」を作者長明の告白とする前者の考え方は、研究の進んだ現在では成立し難いであろう。また、後者の中でも、安良岡のように「結び」を「自己否定的発展である点において、止揚的意義を持つものである」とまでするのは、「結び」文末にある「ただかたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ」という不徹底な行為からすると、無理があると考えられる。

後者の考え方に属する佐竹昭広は、「結び」を『自謙句』『卑下句』として読まねばならない<sup>(註13)</sup>としている。そうした考えに従えば、高校の授業では、無理して「結び」まで読ませる必要はなく、「閑居の気味」まで採り上げれば十分ということになるだろう。しかし私は、「結び」が謙辞であるとしても、その言葉に真実味がこもっているように感じられてならない。

木下は、『方丈記』の終章の方法<sup>(註14)</sup>において、難解句「そのとき心更に答ふることなし。只、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ」について精緻な分析をし、「作品の方法と文脈という観点から、『方丈記』を謙辞として読み解いてきた。謙辞とはしたが、緻密に構成されたこの終章には、謙辞を偽装して現れる長明の思想の一端を垣間見ることができよう」<sup>(註15)</sup>と述べている。長明の思想とは、「不請の阿弥陀仏」(木下の分析に従い「衆生が請わずとも救いの手を差しのべる阿弥陀仏」とする)に帰依しようとする念仏信仰であろう。「結び」には、謙辞の中に阿弥陀仏に真摯に帰依しようとする長明の姿が垣間見えると、私は考えたい。既に述べたように、私は授業ではできれば「結び」を扱い、『方

『方丈記』の全体像を捉えさせたいと考えている。ただし、今後授業を行うならば、「結び」は、長明が緻密な構想の下に、当時の文章表現の型に則って方丈の暮らしへの反省を述べた章段であることを説明し、授業を行うだろう。その上で、どのように「結び」を読むかは、学習者に任せたい。そのような授業展開にしたとしても、自己を振り返ることの多い思春期の生徒に、「結び」まで読ませる価値は十分にあると考える。

第二の分量の問題については、次のような対応策を考えている。

ア 「方丈記」の全体像をおおよそ把握できるように、「序」「安元の大火」(あるいは「養和の飢饉」「方丈の暮らし」「閑居の気味(一部)」「結び」を教材とする。教科書にない部分は、補助教材とし資料を作成する。

イ 生徒が親しみをもって読めるように、また短時間で扱えるように、補助教材は現代語訳付きにしたり、傍訳付き本文にしたりする。

以上のような工夫をこらせば、次のように全八〜九時間の単元に行きわたることができる。この時間数であれば、「結び」まで採り上げた授業実践は十分可能であると考える。

『方丈記』の紹介と「序」	…… 2時間
「安元の大火」	…… 1時間
（「養和の飢饉」の場合は、2時間）	
前半のまとめと「方丈の暮らし」	…… 2時間
「閑居の気味」	…… 1時間
「結び」	…… 1時間

全体のまとめ…………… 1時間

## 7 まとめ

平成二五年度から実施されている新学習指導要領の国語科の改善方針では、新教育基本法第二条の五にある「伝統と文化の尊重」を受け、「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」としている。この点からみると、『方丈記』は文章が比較的平易で親しみやすく、採り上げやすい古典作品である。また、分量は少ないが多面的な魅力をもっており、採り上げ方、指導の仕方によって、生徒が色々な面から興味を持つことができる作品である。自分の授業実践の経験からも、「生涯にわたって古典に親しむ」きっかけになり得る貴重な作品であると感じる。そして、多面的な魅力という点で、私は是非「結び」も教材として採り上げたい。「結び」を採り上げることによって、多感な思春期にある高校生に、自己を見つめることの意義も考えさせることができる、と考えるからである。そのようなことができる古典の作品は、余り多くはない。

本稿では、「結び」も含めた単元の計画を示したが、実際の各時間の学習指導においては、生徒が短作文を作ったり、現代の作家の『方丈記』に対する感想を読んだりする時間を設定し、生徒が古典を少しでも身近なものに感じられるよう工夫したい。「結び」も採り上げた具体的な学習指導案については、今後さらに研究していきたいと考えている。



引用文献等

- (注1) 五段構成とするものは安良岡康作(1980)『方丈記』概説(『方丈記全注釈』講談社学術文庫)、二七五頁、佐竹昭広(1989)『方丈記管見』(新日本古典文学大系『方丈記徒然草』岩波書店)、三六八頁など。
- (注2) 西尾実(1951)「方法論的にみた『方丈記』の作品研究」(『西尾実国語教育全集』第九巻 教育出版)、四一七頁
- (注3) 今成元昭(1974)「運嵐方丈記の論」(『文学』2月号 岩波書店)、一一五～一二七頁
- (注4) 佐竹、前掲書、三六八～三七〇頁
- (注5) 教科書には、鴨長明の他の著作『無名抄』『発心集』を採るものがあり、その場合長明の人物像を別の面から紹介することもできる。
- (注6) 井村宏之(2003)『方丈記』の教材的意義と可能性(大分大学『国語の研究』)、三二～三三頁
- (注7) 高橋和夫・酒井麟児(1972)『方丈記』ゆく川の流れ 教材の扱い方と実践授業の展開(『古典の教え方(日記・紀行・随筆編)』右文書院)、一六六～一六八頁
- (注8) 長尾高明(1990)『方丈記』教材化の方向(『古典指導の方法』有精堂)、一一九頁
- (注9) 木下華子(2012)『方丈記』終章の方法(『文学』3・4月号 岩波書店)、九五頁。
- (注10) 安良岡、前掲書、二七六頁
- (注11) 大曾根章介・三木紀人(1976)「シンポジウム・日本文学」中世の隠者文学(『学生社』)、一一七頁
- (注12) 木下、前掲書、九五頁
- (注13) 佐竹、前掲書、三六九頁
- (注14) 木下、前掲書、一〇五頁

